

# 琉球大学学術リポジトリ

## 東アジアの先史文化と琉球列島

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-15 キーワード (Ja): 先史文化, 東アジア, 琉球列島, 台湾, 東アジア亜熱帯島嶼域, 大陸系遺物 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/33087">http://hdl.handle.net/20.500.12000/33087</a>

# 東アジアの先史文化と琉球列島

後 藤 雅 彦

Masahiko Goto

## Study of Prehistoric Culture in East Asia and Ryukyu Islands

本稿は、最近の東アジアの先史文化の地域的枠組みや琉球列島と周辺地域との関わりに関する諸見解や中国大陸系遺物の分布をふまえ、東アジアの先史文化における琉球列島の位置づけについて検討を加えた。そして、研究対象地域として東アジア亜熱帯島嶼域を設定し、台湾との比較で、農耕民の移動や大陸系遺物の広がりを明らかにする視点を検討した。

キーワード:先史文化、東アジア、琉球列島、台湾、東アジア亜熱帯島嶼域、大陸系遺物

### はじめに

琉球列島は九州島から台湾島までの約1200kmの海洋上にある島々で構成され、この琉球列島を舞台としたヒトの移動、交流は旧石器時代から行われており、港川人の系譜が問題にされ、考古学的には奄美諸島の事例から東南アジア島嶼部、台湾、中国南部の「不定形剥片石器群」の広がりが指摘されている（加藤1996、小田2007）。新石器時代以降、その系譜に関しては様々な可能性が考えられるが、琉球列島の独自性が注目されながら日本本土を中心に周辺地域との交流も想定されている。吉成直樹（2011）は、琉球弧の後期旧石器時代から琉球王国形成期までの研究史を整理する中、貝塚時代に台湾、フィリピン、インドネシアなど南方的な文化の北上が、考古学的なモノの証拠は不足しているとしながらも、その可能性を指摘している。

そして、グスク時代を経て琉球王国というより独自の地域世界が成立する。こうした地域的な変化をとげる中、東アジア世界との対外交渉が重要な意味をもち、むしろ東アジア世界との関わりの中で独自の地域世界が形成されたとも理解される。

そこで、本稿では、筆者がこれまで取り組んできた琉球列島先史文化と周辺地域、とくに南中国や台湾との比較研究（後藤2004、2007、2008）をふまえ、さらに最近の東アジアの先史文化の地域的枠組みや琉球列島と周辺地域との関わりに関する諸見解を概観し、東アジアの先史文化における琉球列島の位置づけについて検討を加えたい。

とくに研究対象地域として東アジア亜熱帯島嶼域（第1図）を設定し、台湾との比較研究の課題をあげていきたい。

## 1. 東アジアの先史文化の枠組み

内山純蔵とカティ・リンドストロム（2011）は、日本海と東シナ海をあわせた海域である東アジア内海沿岸を新石器時代の歩みの違いから4つに区分している（第2図）。

①中国大陸の南部、長江下流域を中心する「原初水田地帯」

②遼東半島、朝鮮半島南部から中部山岳地帯より西の日本本土「淡水環境適応地帯」

③黄河下流域から北、ロシア沿海州、本州中部山岳地帯より東の日本列島「雑穀栽培地帯」

④南西諸島から台湾にかけての「亜熱帯島嶼地帯」

ここで④の亜熱帯島嶼地帯の南西諸島についてみていくと、氷河時代終了後の海面上昇で大陸から切り離されたあと、いったん人が居住しない場所となった。7千年前に現れる土器から判断すると、九州方面からまとまった植民があり、複合狩猟採集社会が成立（新石器化期の開始）。その後何度か遺跡の増減を繰り返した後、12世紀に水田稲作中心の社会に急速に移行し、



沖縄では14世紀に3つの主要な王国が形成、後の琉球王国の社会的基礎の整備（新石器化期の終了）という過程を辿る。

筆者も琉球列島の先史文化について周辺地域の中でも最も近接する位置にある台湾を重視し、琉球列島と台湾を東アジア亜熱帯島嶼域と設定し、比較研究を進めている<sup>(1)</sup>。この東アジア亜熱帯島嶼域を取り囲むように、北に日本列島、南に東南アジア島嶼域、西に中国大陸、そして東に太平洋地域がひろがるのである。

また、東アジアの先史時代における地域区分として、宮本一夫（2011）は大きく長城地帯といった北方草原地帯の「牧畜型農耕社会」、黄河・長江流域の「農耕社会」、東北アジアと中国西南部の二つの「二次的農耕社会」の4つに分けた（第3図）。

穀物の栽培化によって定住化あるいは半定住化した東アジアの新石器社会では、当初同じ部族社会として社会進化上の差違はみられなかったが、その後の社会進化には差違がみられ、社会進化上、急速に社会が変化したのが集約農耕社会を確立した「農耕社会」であったとしている。

そして、二次的農耕社会とは、「もともとが狩猟採集社会であって、穀物栽培が開発できない条件下にあった地域が、農耕社会の農耕民の拡散とその交配によって文化変容し、二次的に農耕社会を受け入れた地域」としている。

こうした農耕の拡散について、陳有貝（2010）は台湾が東アジアの一島としてほかの島より早め今から6千年余り前に農耕社会に入ったことについて、台湾島が「地理上東アジア農業の起源地に近いとため、早くから移民が直接に農業をもたらした」、また、台湾島の生態環境の多様性から、「農業発展にふさわしい条件が数多くあるため、農業は台湾新石器時代以来非常に盛んな生業形態になった」としている。

さらに、生業の視点から台湾と南琉球の文化関係について言及し、漁獵・根茎作物の栽培を主要な生業形態にする先島諸島（南琉球）に対して台湾東海岸ではすでに穀物農耕栽培の段階にあることを指摘し、「特定な歴史事件



第1図 東アジア亜熱帯島嶼域設定図

第2図 東アジア内海沿岸の新石器時代  
出典：内山純蔵、カティ・リンドストロム（2011）

第3図 東アジアの先史時代 出典：宮本一夫（2011）

がない限り、民族の移動や貿易交換が台湾と先島の間で存在する必要がなかった」としている（陳有貝 2004）<sup>(2)</sup>。

筆者が設定している東アジア亜熱帯島嶼域における台湾と琉球列島の大きな差異がここにみられるわけだが、農耕文化の拡散を知る上で、近接する地域間の比較はただ拡散ルートの復元という意味だけでない重要な問題を含んでいるのではないだろうか。すなわち、従来、農耕の拡散として、当然その広がりが追及されてきたわけだが、農耕が定着しない、あるいは積極的に農耕を受容しないということについて、琉球列島に居住した人々の生活様式とその変遷、あるいは対外関係の変遷から考えていくことも重要であろう。

奄美・沖縄諸島において、先史時代にも本土弥生人／文化という農耕民とのコンタクトがありながら農耕を受け入れず、狩猟採集から農耕への変遷は10世紀から12世紀の間とされ、「突然」農耕が始まった要因は北から農耕民が島へ植民し、新しい生業で適応したとされる（高宮 2009）。

考古学的にも11世紀代に琉球列島に持ち込まれたモノ（カムイヤキ、滑石製石鍋、中国宋代白磁）は琉球列島の人々の自発的活動によって獲得されたものでなく、琉球列島外の人々（基本的には日本列島から南下する）によって持ち込まれたもので、これらの物質文化をもった琉球列島外の人々が関与することで、琉球列島社会を農耕社会へ転換される文化複合体の再編がすすんだと理解される（池田 2011）。

このように東アジア亜熱帯島嶼域では、時代が大幅に異なるが、新石器時代の中国大陸から台湾への農耕をもたらした「移民」、11世紀代におそらく日本本土からの農耕民の「植民」とともに積極的な農耕民の移動がそれぞれ想定されているわけで、こうした移動の時代的背景や影響が問われるのである。さらに、こうした農耕民の移動の他に、定着しない農耕の波及をいかに遺跡から読みとるかも今後の課題ではないだろうか。

## 2. 琉球列島先史文化の枠組み

ここでは、琉球列島の先史文化と周辺地域、とくに北の日本列島との関わり、および東アジア亜熱帯島嶼域に含まれる台湾、そして中国南部、あるいは東南アジア世界との関わりに関する諸説を整理してみたい。

まず、琉球列島の先史文化に関して、周辺地域とくに日本本土の九州島との関わりを念頭にいれても、以下の3地域あるいは2地域に地域区分するのが一般的である。

- ① 琉球列島北部圏 大隈諸島
- ② 琉球列島中部圏 奄美諸島から沖縄諸島
- ③ 琉球列島南部圏 宮古諸島から八重山諸島

①と②はトカラ列島がその境界となり、②の沖縄島と③の宮古島の間には宮古凹地がはしり、約250kmの隔りがある。日本本土の九州島との関わりからすれば、北部圏はその文化的な影響が強く、中部圏は基本的に縄文文化の範囲に入り、その後も九州島からの影響を一部受けながら、11世紀頃まで先史文化が展開する。この2つの文化圏を北琉球と呼ぶこともある。そして南部圏すなわち、北琉球に対し南琉球では、やはり11世紀頃まで継続する先史文化であるが、中部圏とは異なる系譜をもち、東南アジアから台湾へと通じる南方的要素が想定されている。そして先史時代においては、いくつかの要素が共有されるものの独自の変化をとげる。

伊藤慎二(2006)は世界における縄文施文土器と口縁部突起土器の分布状況を検討し、縄文文化と類似した生態環境が広がる東北アジアを比較し、縄文施文の類縁性と口縁部突起土器から独自性を再確認した。そして縄文文化の南の玄関口にあたる琉球列島を検討した結果、北琉球(トカラ・奄美・沖縄諸島)について、縄文施文を欠くが「口縁部突起」から縄文文化の範囲に組み込めることができるとしながらも、「口縁部突起」の出現と消滅が、日本の他地域と比べて遅く、前Ⅲ期後半、前Ⅳ期後葉、後期中葉には極端に減少、または皆無になり時期があり、特殊で不安定であるとした。そして口



縁部突起存続状況の不安定性・特殊性は、縄文文化の「周縁部」的現象であるか、琉球縄文文化以外の地域からの影響が関与したこと可能性もあり、琉球縄文文化の主体的独自性の反映のみではなく、縄文文化とは異質の起源をもちその展開過程で「縄文化」した可能性を指摘した。

このように北琉球までは相違点も指摘されながらも縄文文化の範疇という一般的な見方である。その系譜としては爪形文が重要である。本土の縄文時代草創期の爪形文土器との関係については、帰属年代の差、伴出石器の違いなどもあり、南島爪形文土器と呼ばれているが、その系譜は現時点では明らかではない。ただし、台湾においても完新世に入ってもしばらくは先土器文化である長濱文化が継続する点は、東アジアの南の周辺地域に共通し、南の土器出現期の様相に関しても重要な比較研究のテーマにあげられる。

最近の琉球縄文土器の編年研究をふまえ伊藤慎二（2011）は前Ⅰ～Ⅴ期7つの土器様式が存在するが、それらを細別すると28段階に分れ、連続的に変遷する様相を確認し、土器様式の変化する時期が九州以北と一致することを指摘した。

一方、沖縄諸島では高宮広土（2005、2011）は動植物遺体の研究をもとに前Ⅳ期（縄文時代後期～晩期）は、最も沖縄諸島の環境に適応した時代であり、遺跡数が急増し、土器の分布が最も狭いという他の地域とのコンタクトはそれほど必要としていないという現象を指摘している。

同時期、気候変動とともに縄文後期文化の南下が想定される中、琉球列島では最適な環境の中で文化が成熟する点は注目される。気候変動とともに後期文化の南下が想定される中、琉球列島では最適な環境の中で文化が成熟する。この成熟さを示す要素には蝶形骨器などの出現も含まれると考える。

次に、南琉球の考古学研究の中で、とくに台湾との関係を論じたものをあげてみると、まず、国分直一（1980）は局部磨研石斧、下田原貝塚出土土器他について検討を加え、高宮廣衛は土器の比較研究を行うと同時に他の共伴遺物や遺跡のあり方などを視野にいれることが必要であると、実際

に八重山型石斧と台湾の事例として、具体的には台湾中部（高宮他1998）、澎湖群島（高宮他2001）の石器資料との比較研究を進めている。そして、盛本勲（1992）は台湾との比較研究を進める中、明確な系譜関係よりも、むしろ類似した要素のひろがりを如何に捉えるべきか検討している。大濱永亘（1999）も「赤色土器時代の文化の起原」については、「アジア・太平洋地域の先史文化の流れをつかみ、マクロな視野で八重山の先史文化を理解」することを今後の解決策にあげている。

具体的な研究として、伊藤慎二（2006）は下田原期を3段階にその変遷を整理し、「深鉢的器形を含む多様な形式（器種）からしだいに収斂されて形式（器種）組成が単純化し、同時に有文から無文へと進む下田原式系土器群の変遷過程」を捉え、資料不足であるが、その方向性で土器文化の衰退・消滅が導いたと指摘する点は示唆に富む。そして南琉球と台湾側の土器群に部分的な類似性を認めながら、「現状では両者の関係を裏付ける明確な決め手を欠けている」とした。今後の課題として、下田原式系土器群の古い段階、台湾の大盆坑文化以前の土器群などの解明をあげている。

最近においても、安里嗣淳（2010）は南琉球の先史文化は東南アジアに源流をもち、独自の地域的展開をしたものと想定し、南琉球先史文化の物質文化を検討している。その中で土器については、北琉球および日本とは出自・系統が異なり、東南アジア地域などアジア南部に広く分布する「球形土器文化圏」に属すると理解している。石斧については、東南アジアなど南方の粗面整形石斧に源流が形成され、地域的伝統を形成したとしながらも、全面研磨の方角片刃石斧については東南アジア地域からの外来品の可能性も指摘している。

一方、最近の研究では台湾からさらに南の東南アジアとの関係が具体的に検討されるようになった。その具体的資料としては台湾産の玉器・玉材の広がりである。飯塚義之（2010）によると、台湾玉器文化は紀元前2000年ころから紀元前後まで栄え、鉄器時代になると衰退するが、フィリピン、ボルネ



オ島西部という東南アジア島嶼部からベトナム中南部で玉石を用いた文化が連続し、一部では台湾産のネフライトを用いた装飾品が用いられており、台湾から製品というよりも原石が運びだされたと考えられている。

このような状況をふまえ、陳有貝（2008）は台湾とフィリピンや東南アジアとの一定の文化関係を認め、さらにその背景として台湾と東南アジアの原住民がオーストロネシア語族に属し、類似した文化風習とコミュニケーションのできる類似言語をもつことから、物質文化の交流が形成されたと理解している。そして、台湾と琉球は異なる民族に属することから、「文化交流に対して越えにくい大きなギャップ」があったと想定する。

以上、諸見解を整理すると、今だ詳細は不明、あるいは具体的な資料の不十分な状況であることは否定できない。しかし、角南聡一郎（2008）が指摘するように「広い視点に立って比較をこころみたり、イレギュラーな資料も無視せず評価しようとする努力が、さまざまなかたちをとる海上の道を復元する手掛かり」となることを念頭に比較研究をさらに進めることが必要である。国分直一は、『南島先史時代の研究』（1972年）の中で、技術として、石器、木工、弓射の技術、漁撈技術、猪猟と猪の家畜化の問題、皮革加工、織布と樹皮布をとりあげている。こうした多方面にわたる比較研究を今後も進めていくことが望まれよう。

### 3. 大陸系遺物

琉球列島の歴史的展開を考えると、中国との関係は重要であり、それは中国大陸との地理的距離の近さがその背景にある。こうした中国大陸との関係は東アジア世界で重要な研究テーマであることはいうまでもないが、その中でも東アジア亜熱帯島嶼域はその距離の近さや意義の大きさは注目される場所である。藤本強（1988）は、北海道・南島は、「中の文化」（弥生時代以後の本州・四国・九州）の中心地と中国大陸との「地理的距離」と大差ない距離にあるとし、あるいは中国の基点となる場所によっては、むしろそ



の距離は近いとする。また、「文化的距離」については、弥生時代以降は少なくとも「中の文化」との距離が近いとしながらも、「中の文化」ではみられないものが北海道・南島にはみられるとして、南島における城嶽貝塚出土の明刀銭、種子島広田遺跡の貝符・貝製品を例にあげ、「中の文化」の太い道とは全く違った道もあったことを指摘している。

ここで、中国大陸と関わりと想定される大陸系遺物に関する研究を整理してみたい（後藤2008）。木下尚子（1999、2003）は、東アジアに広範囲に広がる貝珠の中で、琉球列島の貝珠について、まず「東中国海横断ルート」の第一の波及として紀元前5000年紀後半にマクラガイやタカラガイ採取にやってきた中国沿岸民によって伝えられた可能性があり、紀元前2000年紀にピークを迎え衰退し、「台湾ルート」は紀元前3000年紀後半から同2000年紀に伝播し、これは玉加工技術を伴う中国新石器文化が台湾に入り、この流れの末端が台湾東岸から有視界域の先島諸島に伝わったものと想定した。すなわち、琉球列島における貝珠の分布状況の複雑さから広田遺跡を中心とした時期の分布も加えて、前後3回にわたって貝種が登場したが、それぞれは互いに連動しない文化現象の可能性が高いとした。その背景として、琉球列島の南北での交流のないことがあげられている。

国分直一（1995）は、近年の研究状況をふまえ、琉球列島の先史文化の形成について、北方の九州との交流と南方の台湾・江南、さらに海南の島嶼地方との交流のあり方に関する研究課題は多岐にわたるが、港川人の登場とその道、宮古海峡を挟む南北における先史文化の様相、琉球先史文化の中に登場した中国古代の文化要素、琉球列島における栽培植物登場の道の4点に絞って言及している。この内、国分氏がとりあげた中国古代系要素である中国銭貨（明刀銭・五銖銭）や鉄柄銅鏃（鉄銚銅鏃）の波及について、東南中国沿海側は「戦国時代以降、秦の始皇帝、漢の武帝、三国時代の呉の孫権らによる相次ぐ厳しい制圧にあった地方」であり、こうした中国海における軍事行動が同じ水域にある琉球列島に影響を及ぼしたことを想定している。こ

これは、文化の波及に関して、琉球列島という内部における社会変化が重要であろうが、その社会的背景として、東南中国沿海側の動きを的確につかむ必要があることを示していると考えられる。

また、琉球列島に広く開元通宝が広がり、奄美諸島2遺跡5枚、沖縄諸島8遺跡41枚、八重山諸島3遺跡35枚（石垣崎枝赤崎貝塚33枚）が出土している（上村2004）。こうした琉球列島出土の開元通宝の意義について高宮廣衛によって研究が進められ、島外との関係で貨幣の利用が想定された（高宮1995）。また、開元通宝とヤコウガイ交易の関係を積極的に捉える見解もある（木下2000a、b）。

開元通宝の琉球列島での出土する意義について、宝物・祭器的な意味合いやたとえ貨幣として使用されても限定的なものであったとされ、またその後一旦「銭貨不振の時期」（11・12世紀）になることから、継続的に貨幣経済の発達を導くことはなかったとされる（小畑2003）。このように琉球列島で出土する中国が生産地であることが疑いのない開元通宝にしても、その波及ルート、あるいは琉球列島で出土する背景・意義、時代性、継続性など検討課題は多い。さらに周辺地域における開元通宝の出土事例の比較研究、とくに同じく東アジア熱帯亜熱帯島嶼域に属する台湾の開元通宝の出土例は重要である（高宮・宋1996）。

こうした開元通宝の琉球列島で出土することの対外交渉上の意味が検討されているが、さらに琉球列島の南北にわたって共通して出土する意味について、琉球列島先史文化の枠組みを考える上でも重要な問題である。すなわち開元通宝がスイジガイ突起部加工品（スイジカイ製利器）とともに南北琉球列島に分布することに注目し、北から南への展開の波及を想定する見解、あるいは木下（2000b）のように「北から南、あるいは南から北に向かう一連の動きの中で連続的にもたらされたものでなく、個々別々にもたらされた可能性が高いとする意見である。

そもそも日本列島の中で、南の窓口として琉球列島が位置づけられるよう



に、琉球列島にもいくつかの窓口、沖縄本島を中心とした東の窓口、八重山諸島を中心とした南の窓口があったことも想定する必要があるだろう。むしろ、こうした琉球列島内の状況理解を深めることが、今、求められているのではないだろうか。

また、地域社会における外来要素のもつ性格や意義についても考える必要があるだろう。中園聡（2004）は沖縄諸島に搬入された大陸系金属器について、弥生社会においてさほど価値の高くないものが選別されているが、大陸系であることはかわりなく、南西諸島の人々にとっても、「中国や朝鮮半島などの存在や、それらに対する何らかのイメージが形成された」とする見解も示唆に富むものといえる。

さらに、先史社会における文化の系譜や地域間交流を検討する上で、商品として生産・流通された遺物研究から交易についてアプローチするばかりでなく、地域間の比較研究を通じて、地域文化間に存在する共通性と異質性を追求することも必要であると考えられる。

#### 4. 今後の課題と東アジア亜熱帯島嶼域の先史文化

ここで、まず東アジア亜熱帯島嶼域として、台湾の先史文化との接点をあげてみると、先史文化の時間的な継続が長く、持続した地域文化ということが両地域に共通した特徴である。琉球列島の北琉球（中部圏）では旧石器時代－新石器時代（貝塚時代早期・前期・中期、貝塚時代後期）－グスク時代（11世紀以降）と続き、その後、琉球王国時代となる。なお、南琉球の先史文化は新石器時代前期（下田原期）と新石器時代後期（無土器期）に大別される。台湾においても鉄器時代が今から350年前まで継続することを考えると、先史時代において時間を限定して比較するのではなく、各地域文化の動向を継続した時間の中で捉えることが必要であり、陳有貝（2005）は先史時代からグスク時代への変化を捉え、さらに台湾と比較していることは重要である。



琉球列島における考古学研究において、台湾考古学との接点は文化の系譜に関する点、文化交流に関する点ばかりでなく、島嶼域における人々の生活とその変遷に関する点をあげることができる。

交流という視点において、影響関係として捉えるだけでなく、地域文化の変化が問題となってくる。そして、その交流が行なわれた時代的背景が問題となろう。最近、筆者は長江下流域を頂点とし、東南中国と琉球列島を囲む三角形に広がる海域における地域文化の動向と地域間交流の様相の比較研究を進めている。とくに中国大陸で初期国家が形成される時期である紀元前2千年紀に焦点をあてている（後藤2007）。一方、琉球列島でも北琉球では縄文文化の影響を受けながら、地域文化としての個性を発揮するようになり、南琉球でもさらに別系統と考えられる土器文化（下田原式土器）がこの時期（下田原期）に出現する。

このような時代の変革期において、琉球列島の先史文化に中国大陸の影響が認められるか問題になろう。北琉球においては同時期に「蝶形骨器」などの特徴的な考古資料が出土し、日本本土の縄文文化につながらない要素として注目されている。南琉球についても、その文化的系譜として台湾の土器文化との比較をはじめ南方地域との関わりが追及されている。またタカラガイの供給地として注目されているが、いずれにしても具体的なモノの分析から中国大陸との直接的な関係について現時点で判断するのは難しい。しかし、東南中国沿海地域の先史文化の動向から海をめぐる交流について推察すると、紀元前2千年紀における東南中国の沿海ルートによる交流は、重層的なネットワークと技術からモノそして人の移動を伴う交流であったと考えられる点が重要であり、それまでとは内容的にも異なる多方面の交流が行われている点に注意する必要があると考える。その延長線上に台湾との交流があったのであり、さらにその先に琉球列島が浮かんでくるか問題になってくるのであろう。今は各地域文化の動向のさらなる比較が必要であろうと考える。

沖縄の考古学において、奄美諸島との違いも含めて琉球列島を構成する

島々の違いが明らかになっており、こうした状況は台湾考古学における地域文化の研究の進展にも通じ、文化の系譜を探求するにあたって、このような地域性を十分考慮する必要があると考える。

台湾北部の十三行遺跡で出土した貿易品、ガラスや瑪瑙製の装飾品、青銅器、金銀器、中国銅銭や磁器などから、台湾本島内の各地区内間の交易や往来が頻繁になり、さらに漢文化と接触関係が生じたことが指摘されている（臧振華1995）。その一方、葬制の差異などから台湾鉄器時代文化にみられる地域性について、それぞれに居住する現在の原住民とある程度の関係が想定されている（連照美2001）<sup>(3)</sup>。

こうした東アジア亜熱帯島嶼域の先史時代にみられる地域差を十分意識することも今後の一つの方向性と考え。それは前述したように貝珠や開元通宝が南北琉球で広く分布することに対し、琉球列島の南北間の関係をどう捉えるか、これら的大陸系遺物は台湾にも出土事例があるわけで、その出土遺跡が含まれる地域の位置づけが問題ではないだろうか。高宮廣衛・宋文薫（1996）は台湾の出土事例を検討し、澎湖諸島の事例は漢民族の文化層に含まれるもので同族間の交易で、十三行遺跡下層出土品は琉球列島と同じように異民族に受容されたと指摘している。あるいは、北琉球にしても奄美諸島と沖縄諸島の差異である。奄美諸島では7世紀になるとヤコウガイ大量出土遺跡が出現し、螺鈿原財・威信財としてのヤコウガイが注目されると同時に、多数の鉄器が確認されている（高梨2007）。従来、沖縄諸島・先島諸島における鉄器の普及は12世紀前後とされていたが、奄美諸島では7世紀の段階で鉄器使用がはじまり、この鉄器のように琉球列島の中でも分布が異なる要素が認められる。中国古代系要素である中国銭貨である五銖銭が久米島に集中することから、同島の地理的位置からも中国との窓口である想定もある（上村2002）<sup>(4)</sup>。

その後の歴史的展開においても、開元通宝の広がりやグスク時代以降の中国陶磁器の広がりのように、その時代的背景を通じて東アジア地域との比較



研究が望まれ、その中で琉球列島と台湾の関係も新たに検討していくことが重要である。そして、台湾といっても台湾島も一つとして把握するのではなく地域ごとの状況と比較する、とくに大陸系遺物の搬入の様相がより明確につかめるようになると考える。

また、南琉球にしても、八重山諸島と宮古諸島の関係も重要ではないだろうか。島袋綾野（2011）が先島諸島の先史時代を概観する中、「下田原期の分布範囲が北は多良間島から南は波照間島までの範囲であったものから、無土器期になると宮古島でも見つかるとし、先島諸島全域に広がるとし、さらに遺跡数では八重山諸島に多いが、放射性炭素年代の測定値では宮古諸島が古くなることに、無土器期の開始期に関係するかを検討課題にあげている。

筆者は、こうした多様な地域文化の存在を確認することが先史文化研究の重要なテーマと考える。そして、琉球列島という範囲に束縛されず、少なくとも東アジア亜熱帯島嶼域として台湾を含めた地域文化の動向の中で、大陸系遺物の出土状況を検討し、その時代的背景から搬入経路を想定することが必要となると考える。こうした多様な地域文化を捉える視点は、農耕民による積極的な移動以外での農耕の波及の解明にもつながるのではないだろうか。

## おわりに

島嶼域における地域間交流を考える上で、交流の重層性は重要であり、沿海地域間の交流は島と島という近距離の交流の積み重ねによって、より広範囲な交流が成り立つと考える。

しかし、ただ積み重ねによって重層化が形成されたのではなく、そこには島嶼域外からの大きな働きかけもあったと考える。例えば開元通宝の広がりなども当時の東アジア世界の動向の把握することが重要であり、東アジア亜熱帯島嶼域の中での大陸系遺物の分布とその意味を比較検討しなくてはならない。



東アジアにおいて亜熱帯島嶼域という自然環境の中で形成された琉球列島の先史文化について、島々という様々な地域における多様性の中で培われた生活様式を捉える一方、交流による地域間の関係を追及することが重要である。そして、同じ東アジア亜熱帯島嶼域として台湾との比較が、農耕民の移動や大陸系遺物の広がりをも明らかにする上で有効となると考える。そこには農耕民の積極的な移動以外の農耕の波及なども新たな課題としてあげておきたい。

本稿では、東アジアの先史文化の枠組みに関する最近の知見をふまえながら、比較研究を行うために琉球列島と台湾を東アジア亜熱帯島嶼域と設定した。琉球列島の先史文化を東アジア世界の中で位置づけるためには、隣接する台湾との比較が有効であると考えたからである。先史文化の継続性や大陸系遺物の出土事例などの共通性ととも、農耕の波及と導入にみる時間差などの差異を如何に捉えるか。まさに琉球列島先史文化の特質に関わる問題である。

今後、さらに比較研究を進めていくには、広く東アジア世界の中での位置づけを追求するだけでなく、一方では、東アジア亜熱帯島嶼域における地域性を捉えることだと考える。すなわち、琉球列島にしても、南北琉球の差異、北琉球では奄美諸島と沖縄諸島の差異、南琉球でも宮古諸島と八重山諸島の差異、あるいは島ごとの差異である。こうした地域差を捉えることは、琉球列島の多様な地域文化を理解するにあたって、先史文化まで遡る重要な意義であると考えられる。

## 註

1. 平成22年度琉球大学研究プロジェクト支援事業（若手研究者支援研究費）の交付を受け、「東アジア亜熱帯島嶼域の比較考古学の試み」を実施した。その際、台湾大学の陳有貝先生、国立台湾博物館の呉伯祿先生を招聘し、台湾との比較考古学的視点の可能性を検討する機会を得ることができ

た。

2. 陳有貝（2002）はそれ以前にも琉球列島と台湾の先史文化との関係を旧石器時代と新石器時代の2つの段階ごとに検討を加えている。新石器時代について、とくに南琉球に関して、土器（下田原式土器）、石器（局部磨製石斧、有稜石斧、丸ノミ形石斧）、貝器（貝斧、ヤコウガイ蓋製器物他）をとりあげ、これまでの見解を整理しながら、具体的に台湾出土遺物との比較を行っている。

3. 野林厚志（1998）は、原住民文化の起源と考古学的な事実の関係について、「各集団に特有な文化要素の抽出とその継続性を検証していくことが必要」としている。

4. ヤコウガイ交易の窓口について奄美北部－大和の一つに加え久米島－隋・唐の二つの口を想定する論（安里2010）とそれに資料論的な疑問を含めて反論する立場（高梨2010）の論がある。

## 引用文献

安里嗣淳 2010 「南琉球の先史文化と東南アジア」『南海を巡る考古学』同成社

安里進 2010 「ヤコウガイ交易二つの口と一つの口－争点の整理と検討－」『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群－』森話社

飯塚義之 2010 「台湾製玉（ネフライト）の拡散と東南アジアの先史文化」『海の道と考古学－インドネシアから日本へ－』高志書院

池田榮史 2011 「日本の弥生農耕文化をめぐる最近の考古学諸説と琉球列島」『地理歴史人類学論集』2

伊藤慎二 2006 「縄文文化の南の境界」『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』國學院大學 21 世紀 COE プログラム

伊藤慎二 2011 「先史琉球社会の段階的展開とその要因－貝塚時代前 I 期仮説－」『考古学リーダー 19 先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』六一書房



- 内山淳蔵、カティ・リンドストロム 2011「序章 景観の三時代－新石器化、現代化、そして未来」『東アジア内海文化圏の景観史と環境 第2巻 景観の大変容－新石器化と現代化』昭和堂
- 大濱永亘 1999『八重山の考古学』先島文化研究所
- 小田静夫 2007「琉球弧の考古学－南西陸橋におけるヒト・モノの交流史」『地域の多様性と考古学』雄山閣
- 小畑弘己 2003「出土銭貨からみた琉球列島と交易」『先史琉球の生業と交易』改訂版
- 加藤晋平 1996「南西諸島への旧石器文化の拡散」『地学雑誌』105－3
- 上村俊雄 2002「南島にみる中国文化」『地域総合研究』30-1 鹿児島国際大学
- 上村俊雄 2004「沖縄の先史・古代」『沖縄対外文化交流史』日本経済評論社
- 木下尚子 1999「東亜貝珠考」『先史学・考古学論及Ⅲ』
- 木下尚子 2000 a 「銭貨からみた奄美・沖縄地域の交流史」『古代文化』52
- 木下尚子 2000 b 「開元通宝と夜光貝－7～9世紀の琉・中交易試論」『琉球・東アジアの人と文化』
- 木下尚子 2003「日本列島文物受容の三態－新石器時代の貝珠から－」『立教大学日本学研究所年報』2
- 国分直一 1972『南島先史時代の研究』慶友社
- 国分直一 1980「八重山古代文化をめぐる諸問題」『南島－その歴史と文化－』3、南島史学会
- 国分直一 1995『東アジア地中海の道』慶友社
- 後藤雅彦編 2004『琉球列島先史文化と環中国海地域の比較研究』（平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書
- 後藤雅彦編 2007『紀元前2千年紀の南中国沿岸と琉球列島の考古学研究』（平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書
- 後藤雅彦 2008「琉球列島と中国をめぐる交流の考古学」『中国考古学』8
- 島袋綾野 2011「先島諸島の先史時代－八重山諸島を中心に－」『考古学



- リーダー 19 『先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』 六一書房
- 臧振華 1995 『台湾考古』 行政院文化建設委員会
- 高梨修 2007 「古代併行期の琉球弧」 『考古学ジャーナル』 564
- 高梨修 2010 「列島南縁における境界領域の様相－古代・中世の奄美諸島をめぐる考古学的成果」 『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群－』 森話社
- 高宮廣衛 1991 『先史古代の沖縄』 第一書房
- 高宮廣衛 1995 「開元通宝から見た先史終末期の沖縄」 『王朝の考古学』
- 高宮廣衛・宋文薫 1996 「琉球弧および台湾出土の開元通宝－特に7～12世紀ごろの遺跡を中心に－」 『南島文化』 第18号
- 高宮廣衛・宋文薫・劉益昌 1998 「台湾中部南投県における先史遺跡の調査（概要）」 『南島文化』 20
- 高宮廣衛・宋文薫・連照美 2001 「澎湖諸島の考古調査」 『南島文化』 23
- 高宮広土 2005 『島の先史学：パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代』 ボーイング
- 高宮広土 2009 「農耕と文化の伝播 1 南の農耕」 『ユーラシア農耕史』 4、臨川書店
- 高宮広土 2011 「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したのか：『貝塚時代前Ⅳ期』説」 『考古学リーダー 19 先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』 六一書房
- 陳有貝 2002 「琉球列島與台湾史前關係研究」 『国立台湾大学考古人類学刊』 58
- 陳有貝（森威史訳） 2004 「生業の視点で捉えた台湾と先島諸島との先史文化關係」 『南島考古』 23
- 陳有貝 2005 「従古琉球的歴史發展看台湾」 『中国東南沿海島嶼考古学研討会論文集』
- 陳有貝 2008 「オーストロネシア語族の研究から見た台湾と琉球の先史關係」 『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集－』

- 陳有貝 2010「台湾新石器時代の農業関連問題」『2010年度国際交流展 東アジアの石器－石器にみる農耕文化－』宮崎県立西都原考古博物館
- 角南聡一郎 2008「南島の交流と交易－環東シナ海における位置」『東アジア内海世界の交流史』人文書院
- 中園聡 2004「東アジア的視座に立った弥生時代の再解釈－九州・南西諸島・朝鮮半島・中国－」『沖縄対外文化交流史』日本経済評論社
- 野林厚志 1998「台湾先史文化の起源をめぐって」『台湾原住民研究への招待』風響社
- 藤本強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会
- 宮本一夫 2011「東アジア地域社会の形成と古代国家の誕生」『東アジア世界の交流と変容』九州大学出版会
- 盛本勲 1992「南琉球圏と台湾先史時代研究の現状と課題」『文化課紀要』第8号
- 吉成直樹 2011『琉球の成立－移住と交易の歴史』南方新社
- 連照美 2001「7世紀より12世紀までの台湾－台湾鉄器時代文化およびそれに関する問題－」『世界につなぐ沖縄研究』